==========

GCOE NewsLetter

[No.49　2011/10/28]

---

gCOE後期の開講科目について（再掲）
次回のオープンレクチャー
2011年度第2回大学院生海外派遣事業の追加募集
第40回オープンレクチャーの要約
gCOE研究員ブリーフィング要約
gCOEスタッフ海外出張報告

==========

■　gCOE 後期の開講科目について

gCOE 後期の開講科目は以下の通りです。

【各論】
各論 I（水 3 限：128 講義室）
　佐藤彰一特任教授、森際康友教授、大石和欣准教授

各論 II（月 5 限：共同 2A）
　重見晋也准教授、古尾谷知浩准教授、クレール・ フォヴェルグ特任准教授

各論 III（木 4 限：129 講義室）
　釘貫亨教授、加納修准教授

各論 VI（火 4 限：128 講義室）
　ブライアン・カレン准教授（名古屋工業大学）

【原論】
原論（集中）（129 講義室：2011 年 12 月 27 日、2012 年 1 月 5 日、6 日［2～5 限］、10 日［2～4 限］）
　松澤和宏教授

【共通科目】

博士課程前期課程学生用共通科目
テクスト布置解釈学概論（木 6 限：127 講義室）
　加納修准教授、クレール・フォヴェルグ特任准教授

gCOE の Web ページにも掲載しています。
http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/education/education02/

■　次回のオープンレクチャーについて

2011 年 11 月 30 日（水）18：00～
名古屋国際センタービル 15 階　グローバル COE オフィスにて
講演者：松澤 和宏 教授 （名古屋大学大学院文学研究科・フランス文学）
題目は未定。

決まり次第 web にてお知らせします。
http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/activity/activity03/

■　2011 年度第 2 回大学院生海外派遣事業の追加募集

2011 年度第 2 回グローバル COE「大学院生海外派遣プログラム」の
追加募集をします。

募集期間：2011 年 10 月 26 日（水）～11 月 4 日（金）16 時半必着
第 1 次審査結果発表予定：2011 年 11 月 7 日（月）
第 2 次審査結果発表予定：2011 年 11 月 11 日（金）

詳細は以下をご覧ください。
http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/education/education03/

■　第 40 回オープンレクチャーの要約

2011 年 9 月 28 日（水）18：00～　名古屋国際センタービル 15 階　グローバル COE オフィスにて

講演者：佐藤 彰一 特任教授（名古屋大学大学院文学研究科・西洋史学）
題目：「時間・事件・テクスト —解釈学の挑戦— 」（"Time, Events and Text. Challenge of Hermeneutics"）

歴史テクストにおいて、時間の問題は、歴史学がどのようにして文字記録を解釈し、そこに意味を読み込んで行くかということと切り離せない根源的な価値を持っている。報告はテクスト論を基本的な背景として、時間論と事件論を 2 本の柱として進めた。伝統的な文献学的解釈学が、現象学哲学との出会いによって、今日の解釈学に脱皮したことはよく知られているが、P・リクールの議論が『時間と物語』に体現され、時間を焦点化しているのに対して、H・G・ガダマーの解釈学は時間論への傾斜は極めて限られている。後者における時間論の希薄な側面を補強したのは、ハイデルベルグ大学でガダマーに学んだ歴史家ラインハルト・コゼレックであった。コゼレックのメタ・歴史範疇（その内容は時間の推移のなかで変化する）「経験の空間」と「期待の地平」論を紹介し、18 世紀の啓蒙思想の浸透の中で、過去に属する「経験の空間」が縮小し、「進歩」を旗印にした「期待の地平」拡張されるという重要な変化が生まれたこと、また認知・知覚論において論じられる時間の非連続な積層性という形式の、歴史時間論上の問題に関説し、さらに「事件」と形容される事柄が、因果関係の帰結ではなく、事後に生まれる「後生的」な事柄であるとするミシェル・ド・セルトーに主導された、近年のフランス史学における認識論的転換を紹介した。

■ gCOE 研究員ブリーフィング要約

第 33 回ブリーフィング（2011 年 9 月 28 日）
深津 周太：連体詞「ちょっとした」の成立—情態副詞の程度副詞化が引き起こす一現象—

本発表では、連体詞「ちょっとした」の成立が、そもそもは「さらっとした感触」「はっとした表情」のような［擬態語＋とした［NP］］型の連体修飾表現に端を発するものであることを主張した。その契機として、［擬態語＋と］型の情態副詞「そっと」が程度副詞へと変化したことが挙げられる。この変化により、［擬態語＋とした［NP］］型の「そっとした」が、［程度副詞＋した［NP］］という構造へと再分析され、その後、同じく情態副詞から程度副詞へと変化した「ちょっと」が後者の構造へと埋め込まれた結果、「ちょっとした」が生じたものと考えられる。このような経緯を想定すれば、現代語における「ち

ょっとした」が［擬態語＋とした］型の連体修飾表現と同形態でありながら、＜程度＞の意味を表わすという矛盾が解消されることとなる。

■　gCOE スタッフ海外出張報告

フォヴェルグ・クレール（gCOE 特任准教授）
第九回国際ライプニッツ会議での発表

2011 年 9 月 26 日より 10 月 1 日までドイツ・ハノーファーのライプニッツ大学で開催された「ライプニッツ協会(Gottfried-Wilhelm-Leibniz-Gesellschaft)」主催の第九回国際ライプニッツ会議に出席し、研究発表を行った。 会議の全体テーマは「自然と主観」であった。私は、ライプニッツとロックの関係を議題にしたセッションにおいて、「『人間知性新論』における自然と不安」と題して発表を行った。

「国際ライプニッツ会議」(Internationaler Leibniz-Kongress)は、5〜6 年に一度、全世界のライプニッツ研究者が一堂に会するものであるが、私には今回が初めての経験である。この度の会議には、2009 年に設立された日本ライプニッツ協会から 11 名もの会員が参加し、それぞれ発表を行った。また本会議に先立ち、9 月 21 日〜9 月 25 日には、ハノーファー大学ライプニッツ基金講座主催による初めての「博士論文執筆予定者のための国際研究集会」が開催されたが、ここにも日本ライプニッツ協会から博士後期課程の 2 名の会員が参加し、発表を行った。さらに、本会議には「ライプニッツと日本」というセッションが設けられ、ここでの日本ライプニッツ協会会員 5 名による発表はすべてドイツ語で行われた。日本のライプニッツ研究者の海外活動がうかがわれ、感服した。というのも、フランスではライプニッツ協会はまだ存在せず、ようやく「ライプニッツ研究センター」の開設準備が始まったばかりだからである。

「『人間知性新論』における自然と不安」と題した私の発表は、テクスト布置の解釈学的研究に属する内容でもある。ロック著『人間知性論』がフランス語に翻訳されたことによって、「不安（Uneasiness）」は、マルブランシュの概念としても知られていた「不安(Inquiétude)」としてフランス語圏の読者に解釈された。さらにロックが論じていた心理的な次元に留まる不安は、『人間知性新論』においては、形而上学的な意義を含む Inquiétude の概念として、ライプニッツによって再定義され、その後『自然の解釈に関する思索』においてディドロによっても再定義されたという解釈の流れを背景にして、私は、ライプニッツが論じた「不安」と「自然」の両概念の関係を主題とした。

この度の国際ライプニッツ会議の会場は、ハノーファーのヘレンハウゼン宮のすぐ北隣にあって、ライプニッツがここで 1695 年頃、「現実に存在するものは全て異なる」という、principium identitatis indiscernabilium の原理を教えた、と伝えられる宮廷庭園にも立ち寄ることができて有意義だった。優れた意味で極めて「国際的」だった同会議で得られた多様な知見を、今後は、GCOE の論集や研究会における発表などに活して行きたいと思う。

次回のメール版 NewsLetter の発行は 2011 年 11 月下旬 を予定しています。

GCOE「テクスト布置の解釈学的研究と教育」
Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration
http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/

NewsLetter No.49
発行：GCOE 編集部
編集担当：平野克典
Copyright(C) 2011 NAGOYA UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL OF LETTERS